

とは違った新しい表現手段を用いて、より美しくより完璧な作品を生み出すからだ、と述べている。つまるところ、ワイルドにとって芸術とは、対象を見て印象を受け、そこから想像を（つまりワイルドの言う嘘を）膨らませるもので、それは「観て想う」ことを基盤としていると言えよう。また「仮面の真実」は、芸術的效果について論じているが、特にシェイクスピア劇において、役者はドラマの時代設定と作中人物の性格にそくした衣装をつけることによって、かえってその人物の人柄を表し、劇的效果と劇的状况を作り出すことになるという。これは、役者のつける衣装が観客の眼に訴えて、観客の想像の世界に働きかける効果を狙っているもので、観客の側からは「観て想う」ことによって、事実をつきつけられたり詳細に説明される以上に、事実が、しかも芸術的真実がえられるというわけである。

ワイルドにとって、芸術＝美の世界は、つまるところ、みずからが生きる世界とならねばならず、さらには、その住民としてみずからが一個の芸術品とならねばならないのであるが、その基盤はあくまでも「観て想う」ことにあると言っていいように思われる。

## ワイルドとモーム

佐藤 喬

(慶応大学教授)

ワイルド(1854-1900)とモーム(1874-1965)との間には20歳の年齢差がある。ワイルドはモームの名を耳にしたことがあったであろうか。モームがその処女作 *Liza of Lambeth* によって文壇に登場したのは23歳の時(1897)で、ワイルドはこの年に刑務所から出所し、パリへ行き3年後に亡くなった。ワイルドがモームの名を耳にした可能性は否定しきれないが、確証はない。

ワイルドとモームとの間には、共通点らしいものは見当たらず、むしろ対立点ばかりが目につく。しかし、共通点が全くないわけでもない。そのいくつかを列挙してみると

1. ジャンルの多様性
2. ハイブラウとロウブラウの双方に読者を有したこと
3. 共に天性の皮肉屋で警句の達人であったこと
4. 共に風習喜劇の伝統の継承者であったこと

5. ワイルドはもちろん、モームもある意味では世紀末的唯美主義者であったこと

6. 共にホモセクシャルであったこと

等の諸点を指摘しよう。

伝記的事実からいえば、モームはその青年時代に、ワイルドの旧友達から「第二のワイルド」を以て目されていた、ということがある。事実、モームは作家として出発するに当たり、ワイルドの文体を熱心に模倣した時期があった。やがて彼はワイルドを手本にするのをやめ、正反対のスウィフトのスタイルに近づいてゆくのであるが、ワイルド模倣のあとはモーム後年の諸作品にもいくらか見つけることができる。

文体のみならず、モームはワイルドの作品の構想やプロットさえそっくり借用していることがある。その例はモームの唯一の童話である *Princess September* とワイルドの童話 *The Nightingale and the Rose* との類似にも見られるし、モームの短編 *The Judgment Seat* とワイルドの散文詩 *The House of Judgment* との対比にも見ることができる。

さらにモームは、たとえば戯曲 *Too Many Husbands* の中でのように、ワイルドの警句をそっくり盗用したりもしている。

ワイルドの警句とモームの警句とは、質に相違が見られる。ワイルドのそれはスマートで洗練され、気がきいているが、モームのそれはナンセンスに近い。

ワイルドの同性愛は有名であるが、モームが同性愛者であった事実は余り知られてはいないようである。この傾向は両者の作品の中に、(1)マゾヒズム的特質、(2)女性の描写が偏っていること、の2点となって表われている。

モームは1890年代の世紀末的唯美主義の雰囲気の中でその青春時代を送った。したがって彼の作品には、たとえば *The Moon and Sixpence* の主人公ストリックランドの如き美の殉教者や、*Of Human Bondage* 中の有名なベルシャージュの哲学の如き、人生に「美」のみをしか見ようとしぬ唯美主義の名残が見られる。これは *Cakes and Ale* にも見られるものである。

*Comedy of Manners* の伝統の継承者として、モームはワイルドの系譜上に何を付加したであろうか。ひとつはアメリカに対する風刺であり、他のひとつは女性自立のテーマである、と考えられる。これらはいずれも現代的な問題であり、この点においてモームはワイルドの影響を離脱し、今世紀の作家としての位置づけに堪えるのではなかろうか。

ともあれ、ワイルドをめぐる後輩の一人であるモームが、世紀末のかげらを引きずりながら、20世紀の後半まで生きのびた事実に想到するならば、ワイルドのイメージもひとときわ身近かな、より新鮮なものとして浮び上ってくるように思われる。